

栗野・徒然日記

其の参・夏

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。



それでは一筆!!

2021.6.1 ユスラウメのジャム



6月の意の「水無月」。「無」は「の」の意味とか。いつも思うのだけれど、梅雨本番なのに、紛らわしい？！

3月21日の日記に登場した山桜桃(ユスラウメ)が実を付けました。梅雨の中休みの日差しを受け、ルビー色に輝いています。さっそく収穫。甘さ控えめ、みずみずしいジャムに変身！

店頭には梅の実も並び始めました。例年より、1週間早いとか。近年は衣更えもクールビズにとって代られた感じで5月1日に？ 薔薇の開花も梅雨入りも、今年は早すぎッ！

ペイペイで買い物すると2割還元など、スマホがなければ享受できない民間や行政のサービスが、日常生活にまで浸透してきました。情報化に、ますます急かされている気分。せめて季節は暦どおりに足音を聞かせてほしい。

2021.6.4 花ごよみ・花菖蒲



「県下の交通事故の増加率が全国ワースト1」との記事が岐阜新聞に載っていました。ウィンカーを出さない車、トンネル内で点灯しない車…自分本意な運転がなんと増えたことでしょう。

栗野のまちづくりの大きな課題の一つが通過交通の多いこと。しかも、残念なことに交通量に見合わない脆弱な道路基盤と交通安全施設。小中学生からも、危険を感じた声が多く寄せられます。住民の命を守ることは、最優先のテーマです。[地域ビジョン第3章「まちづくりの芽」](#)参照。ポイ捨てや騒音被害による環境悪化を招いています。まずは、歩行者や住居に配慮した運転マナーの向上が求められます。

降りしきる雨の中、近くの畜産センターの水辺で、花菖蒲が凜としたたたずまいを見せています。花言葉は、「心意気」そして「優しい心」。まっすぐに伸びながら、周りに気づかう雰囲気をあわせ持った日本の花です。



2021.6.5 遠方より、メール来たる



奈良市の旧友から、久しぶりにメールが届きました。懐かしッ!
昨年の5月に大阪で会う約束をしていましたが、コロナのまん延で断念。そんな彼からの近況報告には、写真が添えられていました。伊賀市でブドウ栽培している息子さんの農園での摘果作業風景です。片道1時間半かけて、一人で切り盛りしている息子さんの手伝いをしているとか(会社勤めだった旧友、新たな世界を体験中!!)。

ブドウ栽培が盛んだった伊賀市ですが、近年は高齢化で離農が増えているとか。20代半ばで農業学校に通い始めた息子さん(現在30代前半)は、後継者がいない農園を借りるなどし、若手として参入されたそうです。今では、[伊賀市のふるさと納税](#)の返礼品の一つに、同農園の巨峰が選ばれています。特産物を返礼品にすることで、地域活性化にもつながりますね。ちなみに、岐阜市のふるさと納税の返礼品は、市の[ホームページにて](#)。

いち早くコロナが終息し、友との再会を待ち望んでいます。

2021.6.6 花ごよみ・ルリヤナギ



梅雨の晴れ間、空に溶け込むようにルリヤナギが咲いています。

松江市にある小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が暮らした[旧居](#)の庭に、ルリヤナギが植えられていました。もう半世も紀前のことです。当時は80代とおぼしき女性が旧居を守っていました。八雲もこの花を愛でたのでしょうか。

岐阜市出身の作家、[森田草平](#)の[記念館](#)が鷺山地区にあります。平塚らいてうとの心中未遂事件が有名ですが、それを題材にした「煤煙」など、漱石の門下生として、数々の著作を世に送り出しています。地域と文化のシンボルとして、こじんまりとした庵には、多くの人々の思いが込められています([岐阜市立女子短大研究紀要](#)参照)。

▶昔、小泉八雲邸に伺ったとき撮影した写真です。家守である高齢の女性。品の良いたたずまいが印象的でした(昭和50年)。



2021.6.8 芒種(ぼうしゅ)…手づくりの味



芒種…暦の上では稲などの穀物を蒔く時期。6月1日の日記のユスラウメをジャムにしました。甘さ控えめ、液も少し多めに楽しむことができるのが手づくりジャムの良い点。ジュースをつくった後の青梅で梅ジャムも絶品。どちらのジャムもなかなか入手できませんし、梅ジュースだって、梅酒が主流で、スーパーではあまり見かけませんね。

芒種の候…しばし、スローな時間が流れていきます。

2021.6.10 花ごよみ・半夏生(ハンゲショウ)



7月2日頃を暦の上では半夏生と言ひ、この季節に咲くため付いた名前とか。花穂の下の葉の半分が白くなるため半化粧と言う説もあり、こちらの字の方が、ふさわしい気もします。逆に花の名が暦の由来との説もあり、鶏か卵のどちらかが先か分からないですね。この辺りでは野生種は見かけないけれど、近くの畜産センターの一面に植栽されています。至極丈夫で地下茎により増え、水辺に植えると、とっても似合う花だと思います。栗野地区の森や林、鳥羽川などの空間を、[ビオトープ](#)として手入れし、ネットワーク化すれば、都市空間としても楽しめそう。【参考:市の政策と地域の取り組みは、それぞれのHPで】「[岐阜市緑の基本計画](#)」、常磐地区「[戸石川親水広場](#)」、[「西郷まちづくり協議会」](#)。

2021.6.12 風鈴



今年は梅雨入りが早かったためか(5月6日の日記参照)、梅雨の中休みが長いですね。風鈴も一足早く、夏本番前に飾りました。最近、風鈴を吊り下げている家庭がめっきり減りましたね。クーラーが普及したことも一因でしょうし、騒音と捉える人もいます(昔は、木枯らしに鳴っていたりして、そんな無頓着さ加減が懐かしい)。そういえば、アメリカで17年に一度羽化する蟬が大発生(数十億匹とか)しているそうです。こうなると「岩にしみ入る蟬の声」などと言った風情はなく、立派な騒音です。

最近、夏場は30度越えの日が当たり前になってしまいました。子どもの頃には、夏休みでも、せいぜい32度だったと記憶しています。東京はこの100年間で3.2度上昇したと言いますが、ヒートアイランド現象の影響を受けやすい岐阜ではもっと上昇していそうなのですが…(岐阜市「[省エネのコツ](#)」によれば、100年間で1.7度上昇にとどまるとか)。

6月は「[環境月間](#)」。県内自治体の地球温暖化対策が[一覧](#)で公表されています。

2021.6.14 みょうがぼち



季節のお菓子のご紹介。2月4日の“ぶんたこ”に続き、“ミョウガボチ”（茗荷餅）を、またまた栗野東のN堂さんで買ってきました。すりつぶしたソラマメの欠片が数粒残された餡は、ほんのりした甘味とちょっぴりの塩味。田植えや畑作業の合間におやつに食べられていたとか。皮を小麦粉と米粉で練り、たっぷりの餡を包み、茗荷の葉でくるみ、蒸し上げます。麦(5月28日の日記)やソラマメの収穫期で、ミョウガの葉が入手できる初夏の味です。固有の歴史文化や豊かな自然などの様々な資源がまだまだ眠っています。

※岐阜市の[歴史遺産を活かしたぎふ魅力づくり](#)参照(35 ページ表 3-6 岐阜市の食文化一覧表)



◀ソラマメの餡が黄金色に輝いて見えました。

2021.6.15 クマンバチ



クマンバチ(クマバチ)が、南天の花の周りに羽音をたてて飛んでいます。畜産センターの藤棚へ、開花時期にはよく集まっています。フジの蜜を吸うためには花をこじ開けるだけの力が必要なため、クマバチが受粉の大役を担っているとのことで、これをクマバチ媒花と言うそうです。クマタカ、クマゲラ(キツツキの一種)、クマゼミ、クマネズミなど、生き物の名前に熊がつくと、大きいことを表しますね。クマンバチも体長2センチ超えです。スズメバチをクマバチと言う地域もあるそうですが、本来のクマンバチは、肉食ではなく、普段は人には関心がなく、ただただ蜜を求めて飛び回っています。でも、あの羽音を耳にすると、ちょっと警戒してしまいます。

ちなみに南天ですが、梅雨時に開花することから、雨で花粉が流され、実がならない一因になるとか。我が家では去年は実がなりませんでした。今年はちょうど梅雨の中休みに開花中…実るかな？

2021.6.16 花ごよみ・ネジバナ



栗野台の公園の一面に、ネジバナが咲いています。子どもの頃、長良川の河川敷で、大水で流されてきたのか、時折見かけることがありましたが、雑草の部類に入る割には(これでもランの種類)、他所ではあまり見かけることはありませんでした。栗野台の団地が造成される前の山裾には、結構繁殖していました。造成で絶えてしまったかと思っていたのですが、そこはさすがに雑草。しっかりと生きのびていました(とは言え、短期間で世代交代が起き、生息状況はなかなか安定しないらしい)。名前の由来のとおり、らせん状に花をつけます。右回り、左回り、そしてあまりねじらない個体もあります。

古くは「ねっこ草」として万葉集に歌われています(オキナグサとの異説もあり)。

芝付(しばつき)の 御宇良崎(みうらさき)なる
根都古(ねっこ)草 逢ひ見ずあらば 吾(あれ)恋ひめやも

「あなたと逢うことがなかったならば、こんなに恋に苦しむことはなかつたらうに」。

花言葉は「思慕」。家族や故郷への思いを表すにも、この言葉がふさわしいですね。



◀ちょっとわかりにくいかもしれませんが、あまりねじれていない花も。

2021.6.17 早苗田に映る眉山

梅雨の中休み、早苗田に、眉山が映っています。栗野でも、田は宅地化され、集合住宅が次々と立ち並びます。写真の風景も、いつまで見られるのでしょうか。

アオサギやダイサギは、今でもよく飛来します。一方、ケリを近年見かけなくなりました。けたたましい声で鳴く、飛ぶ姿がちょっと見は、カモメに似た鳥です。繁殖期が田起こしから田植えの頃。耕運機を横目に、キキキキッ鋭い声で威嚇しながらも、なすすべもなく立ち尽くす後ろ姿が、物哀しくもありました。団地が開発される以前、夏の夜にはヨタカの鳴き声が聞こえたものです。

町の風景とともに、生き物の生態も変化しています。



2021.6.21 夏至の日の鵜飼開き



2021.6.22 聖徳太子 1400 回忌



夏至。例年 5 月 31 日の鵜飼開きが、コロナ禍のもと、ようやく今日開幕を迎えました(昨日、県へのまん延防止等重点措置区域の適用が解除)。鵜飼開きには仕事の関係で、何回か観覧船から見た経験がありますが、水量の多い 6 月は見ごろです(秋風の吹くころの 9 月も良いですね)。鵜飼開きの日には、待ちかねたように、地域の人々が岸边に訪れます。

1300 年以上の歴史を有する長良川鵜飼は、鵜匠が一人で 12 羽の鵜を操ります。全国に現存する鵜飼漁の中でも最も多い数と言います。そんな市の財産ですが、残念なことに見たことのない市民も少なくないようです。そう言えば、50 年ほど前に、京都の人でも祇園祭を見たことのない人がいるとの話を伺いました。毎日どこかで祭りがおこなわれているという京都ならいざ知らず(さすがに今では祇園祭を見たことのない京都人はいないかも)、是非一度は見ておきたいものです。遠方からのお客さんをもてなす舟遊びのクライマックスとして楽しむのが最高。

市の財産について、検索サイトで知識を得ておきたいですね。HP の [ぐるたび](#) は、忠実に鵜飼観覧の流れが掲載されていて、おすすめです。深い知識を得ておきたい方は、岐阜市のサイトで [ぎふ長良川鵜飼](#) を。鵜飼は、10 月 15 日まで、中秋の名月の 9 月 21 日を除く毎夜行われます。

写真は、手元にあった明治時代の長良川鵜飼の絵葉書です。明治維新によって保護政策が一時途絶え、鵜匠をやめる人が相次いだと言います。現在は、6 人の鵜匠が、世襲制で受け継いでいます。

鵜飼が記録に残された時代と言え、今年は聖徳太子(最近の教科書では「厩戸皇子」)の没 1400 年に当たります。ちなみに没 1300 年のときに設立された奉賛会に関わったのが、放映中の大河ドラマ「青天を衝け」の主人公である渋沢栄一だったとか。

一説には太子がしたためたとされる、遣隋使が携えた皇帝宛ての親書「日出る処の天使、書を、日没する処の天子に致す」が有名ですが、その一方、隋の制度を参考に、太子は国づくりを進めたと言います。法隆寺を建立したのも太子ですね。修学旅行で行ったのは、もう半世紀以上も前になります。舗装されていない参道には葺替えた古い瓦のかけらが無頓着に転がっていました。現在も寺宝の調査が進められていると言います。市内に目をやれば、金華山の信長居館の発掘調査が進められたのはまだ記憶に新しく、今も [岐阜城跡の調査](#) が進められています。悠久の歴史が、まだまだ市内にも眠っているのですね。

6 月 19 日に岩野田中学で「岩野田を知ろう」をテーマに学習講座が開かれました。岩野田北小学校でも郷土を知る学習が行われています。岩野田の郷土史編纂の気運は希薄ですが、大人も学ぶ機会を是非設けたいですね。

【写真】「日出処の天子」(山岸涼子)は 1980 年代の漫画。フィクションですが、今でもいろいろな意味で話題になります。

2021.6.23 鉄漿蜻蛉(オハグロトンボ)



◀遠くには
行かずに、
ひらひらと
舞っています。

今年も、オハグロトンボが舞いはじめました。羽が黒いのと、お歯黒をかけたのが名前の由来とか。お歯黒は、古事記にも記述があるという最古の化粧法。江戸時代には、既婚者などがするものとされました。でも、時代劇ではあまり見かけませんね。確かに、水戸黄門に登場してきたら、ちょっとひくかも。お歯黒をしていた人は、虫歯がなかったとの説も。

それにつけても、水たまりが近くにないのになぜ庭に多く飛んでくるのか、不思議でなりません(3月18日のアマガエルも不思議)。そんなに餌になる虫が、我が家には多いのかしらん。

2021.6.24 心象風景・松



昭和の末、三輪の太郎丸だったか、松茸狩りに行った記憶があります。もちろん入山料を払って。栗野台の団地開発前の山も赤松林で、秋口になるとビニールテープが張り巡らされました。お隣の高富町は、松茸の産地として有名でしたね。旧道沿いに何軒もの販売所が開設され、商われていました。当時は松枯病のピークで、あちらこちらで松の名木が枯れました。記憶に残っているのは、東別院(大門町)、護国寺(木造町)、妙照寺(梶川町)の松など。

東別院と護国寺の黒松は、棚に枝を四方八方に這わせて仕立てられていました。東別院にある聖徳保育園の園歌には「お庭の松と背比べ」と歌われ、また、護国寺の庭では先々代住職から聞いた話ではテレビのロケが行われたと伺いました。西別院にも同じように棚に這わせた百枝の松があったことを、古い絵ハガキで知ることができます。宛名面には、軍事郵便の文字があり、戦前の風景であることが分かります。これに対して、妙照寺の松は天を突くような高さでした。1688年に同寺に滞在した松尾芭蕉も眺めたのかも知れませんね。

マツノマダラカミキリが媒介するマツノアセンチュウが引き起こす松枯れ病の対策として、当時は山林に空中散布が行われていました。散布後には、栗野の街中でもスズメバチが転がっていたり、ウシガエルの声その後何日間もしわがれたりしていました。

多くの寺社の松が残念なことに失われましたが、栗野西の高台にある[済法寺](#)の入り口には、今も立派な松がそびえ立っています。栗野のまちをこれからも見守り続けてほしいものですね。

2021.6.27 花ごよみ・オオボウシバナ



◀左から、オオボウシバナ、白花ツユクサ、斑入りツユクサ。一度植えれば、毎年こぼれ種で発芽してくれます。

路傍に咲くツユクサの仲間にも様々な変わり種が見られます。白花や斑入りの葉、また実際にお目にかかったことはありませんが白い覆輪の入る花などなど。中でも見応えのあるのがオオボウシバナ。野生のツユクサの何倍もの大きな

花で、その鮮烈な色を絞り、京友禅の下絵を書く染料の原料にされます。アオバナと呼ばれ、[草津市](#)の花にも選定されています。

朝露のように午前中だけ見られることがツユクサの名前の由来とか。オオボウシバナもご多分に漏れず、午後にはしぼんでしまいます。炎天下での短い時間での摘み取り作業は、大変な重労働だったと言われます(今は合成染料にとって代られ、生産量が減少)。観賞用としても、鮮やかなブルーは、夏に良く似合います。以前、高山市の古い町並みで、壺を鉢カバーにして飾られているのを見かけました。景観に溶け込み、とても印象的でした。花卉を摘み、画用紙に押し付けると、3輪でも5cmほどの丸い模様が書けます(指先も真っ青)。とても丈夫な花で、風情もあって、まちづくりでも、面白い素材として活用方法があるかも?!

2021.6.28 地域の食卓・辛子豆腐と角麩



郷土料理は、様々な定義がされていますが、地域伝承されてきた料理としておきましょう。一方、ある地域だけで作られているもの(農水産物や加工食品)は特産物、さらにその地域の風土に適したり、とある名人が作るから旨いという食材は、地域ブランドになります。

栗野のスーパーでも、40年ほど前には、近郊の料理や特産物として[鮎味噌](#)(海津市など)、[玉味噌](#)(関市など)を見かけたものですが(味噌の文化が根付いてますね)、最近では並びません。

今も普通に入手できるものといえば、辛子豆腐や角麩。前者はそのまま食すので、郷土料理というよりは特産物になるでしょうか(最近では、辛子の量が少なくなった気がします?)。角麩は、美濃・尾張地方では、煮物だけでなく、酢味噌和えや中華風など、料理のバリエーションが多そうです。

郷土料理がまちおこしにも活用されている昨今ですが、食卓に上がることが少なくなりつつある郷土料理を通じて、まずは地域の[食文化](#)を見つめ、[食育](#)に役立てていきたいですね。

2021.6.29 地域の食卓・岐阜えだまめ



生産者の直売所に立ち寄ってみました。大袋の枝豆が、わずか200円。例年だとこの店に並ぶのは、鞘に二つだけ豆の入っただけなのにどうしたことでしょう。

茹で方にはいろいろこだわりを持つ方も多いようですが、ごくシンプルに、昆布と塩を多めで茹でました。茹で上がりに冷水を浴びせないなので、色合いは少し劣るかも。味は良好。近年、枝豆の種類も、味覚に特徴ある品が出回っていますから、食べ比べるのも良いですね。

ふと思い出したのが、魚のこと。昔、魚離れが著しい時代に、八戸市で魚料理の普及教室が開かれていたこと。「なぜ、漁港のまちで」と伺うと、みんな良い値段で引き取られる消費地に出荷され、地元に出回らないため、魚を食べる若い人が少なくなったとか。「岐阜えだまめ」も、コロナの影響で関西市場への出荷が減り、生産地にも品が出回るようになったのかな？

2021.3.6.30 ツマグロヒョウモン



ツマグロヒョウモンが、梅雨の合間を縫い、蜜を求めて舞っています。この時期、栗野ではふつうにみられる蝶です。幼虫はちょっと見、怖そうな姿をしていて、とても蝶に変身するとは思えません。スマレの葉を食べて育ち、岩野田北公民館の花壇に植えられるパンジーにも、よく見られます。発見できたら、後日紹介しますね。写真はメスで、翅の端(つま)が黒いのが名前の由来とか。ただ、オスには、この黒い模様がありません。

本州では、1980年代まで近畿地方以西でしか見られなかったと言います。これも、地球温暖化の影響でしょうか。現代生活が生み出した地球課題への対策につながる行動を、一人ひとりが暮らしの中でも実践することが求められています。

【参考 HP】 [岐阜市地球温暖化対策実行計画](#)、[私たちにできること\(東京都\)](#)

2021.7.1 花ごよみ・クチナシ



▲一重咲きのコクチナシはシ2週間ほど早く開花。同じように、甘い香りを放ちます。

雨空の下、クチナシの香りが庭に垂れ込めています。香りを漂わす花の中でも、強烈なインパクト、存在感たっぷりです。秋につけるオレンジ色の実、染料や料理に用いられますが、熟しても裂けない実の「口無し」が名前の由来と言われます。オオスカシバの幼虫の食草で、放っておくとあつという間に丸坊主にされてしまいます。道路などに植えるには、薬剤散布が必要でしょうから、残念ながら適さないでしょうね。雨に濡れて満ちるクチナシの香り。梅雨にふさわしい花です。

7月に入りました。今日は、「国民安全の日」。昨日、千葉県で下校時の小学生を巻き込む痛ましい交通事故が発生しました。まちづくりビジョンでも、栗野の交通安全は大きな課題となっています。小中学校の児童生徒からも、身の危険を感じたことがあるとのアンケートが寄せられています([岩野田北まちづくりビジョン](#) 21 ページ、25 ページ参照)。抜本的な通過交通対策は欠かせませんが、日々、児童を見守ってくださるボランティアの皆さんの尊い活動、本当にありがとうございます？

2021.7.1 ハーブティーの午後



▶ 花弁の色でほんのり染まります。



ショーヘイが思いがけず、対ヤンキース戦に初回ノックアウト。梅雨空も影響して気分は沈みがち。

庭のベルガモットを摘んで、ハーブティーをつくることにしました。カモミールやレモンバームティーは飲んだことがあるけれど、ベルガモットは初体験。レモンバームと混ぜると柔らかみが増すとのことで、ミックスしました(【写真】皿の中央が花弁、下の葉はレモンバーム)。沸かしたてのお湯に花弁と葉を浸して蒸らすこと約5分、間違いなくハーブティーです。紅茶に浮かべても良いそうです。が、飲み慣れたカモミールティーの方が私の口に馴染むかな。むしろ、花弁をサラダにかけて食べたら、きっとおいしいと思う(妊娠中、授乳中、それに甲状腺疾患のある方は控えたほうが良いそうです)。

ちなみに、花の形から和名は、松明花(タイマツバナ)。

つい鶺鴒の篝火を連想してしまいます。

室町時代、関白太政大臣を務めた一条兼良は、鶺鴒観覧の折、捕れた鮎をその場で篝火にかざして食したとか。[岐阜市歴史博物館鶺鴒資料](#)(340-77 濃州長良川鶺鴒図)に 兼良 がその際に詠んだという和歌が添えられています。誠に風情ある逸話ですが、黒焦げになりそうですね。それよりは、[“かがり焼鮎”](#) という岐阜銘菓をおすすめしておきます。

▲とても丈夫で、地域の花壇をハーブガーデンとするときは、採用したい花です。

2021.7.2 胡瓜



写真の下の胡瓜、イボイボのトゲが目立つでしょ。四葉胡瓜(すうようきゅうり)です。ゴールデンウィークに一株買って、植えてみたところ、先月半ばに収穫できました。中国原産で、戦時中に導入されたとか。その後、改良されたものも含め、多くの品種があるらしい。漬物や中華料理にも使われるそうです。生食して比べても、言われてみれば多少違いを感じる程度?!近年、家庭菜園に一押しされる理由は、スーパーで入手困難なこと、栽培が容易で次々と収穫できること、普通種と比べて1.5倍程度の大きさになること(食べごろはせいぜい30cmまでとか)が挙げられます。鋭いイボがあるがゆえに、お互いに傷つけ合ってしまう、流通に乗りにくいんだそうな(それでもよく生きのびてきたねえ?)。思いが募れば募るほど傷つけあってしまう、ヤマアラシのジレンマを彷彿とさせる胡瓜。いただきます。

◀30cmジャスト!! このところの雨で、一気に成長。どこまで大きくなるか試してみたい?

2021.7.6 茄子



「親の小言となすびの花は千に一つの無駄もない」という言葉がありますね(多少言葉遣いに差が見られますが)。茄子の花は咲いたら必ず実になるように、親の小言も子が育つために大切なことを言っている、という意味。小言でなく、褒めたり、時には厳しく接することも求められますよね。そもそも躰(しつけ)という言葉の概念も、一筋縄ではいかない。

核家族化でともすると子育て世代は孤立しがち。くれぐれも一人で悩まず、相談できる機会を確保しておきたいですね。市の窓口の[岐阜市子ども・若者総合支援センター](#)、[子ども家庭支援センターぎふ](#)や[教育相談体制連携マップ](#)、[子育て](#)も参考に。また、幼児を遊ばせながら、地域の子育て中の仲間が集う場として、[岩野田児童センター](#)が身近に開設されています。

我が家の茄子、無農薬なのですが、実ったばかりの実に8ミリほどの直径の穴が開いていた。どうやら蛾の幼虫のせい。オオタバコガやハスモンヨトウが有名だけど、産み付けられた卵が違うみたい。

いずれにしても、何事も「無関心は実らない」?

◀葉の裏に産み付けられた卵を駆除。

2021.7.7 優曇華(ウドンゲ)の花



優曇華の花は縁起が悪い、と子どもの頃から聞かされてきたのですけれど、つぶすのはかわいそう。卵の正体のウスバカゲロウは、成虫になっても、か弱そうなもの。仏教の経典では、優曇華は 3000 年に一度花開く花を指すとか。めったに見られないことは、この卵も同じ。だからこそ、その後、不吉という話になったのでしょうか。

今日は七夕。年に1度の織り姫、彦星の逢瀬、雨か曇りか微妙な予報。天の川が増水するとお流れに…。

全国で大雨被害が出ています。大雨の被害が珍しいことではなくなっているのには、温暖化や山が荒廃したことが一因だろうけれど、全国隅々の情報がリアルタイムで共有されるようになったこともあるのかも。

大雨、台風、地震、噴火…災害大国と言われる我が国。常に非常時への備えを、個人はもとより、地域として身に付ける必要がありますね。

2021.7.7 スイカ Kさんの投稿

楽しみにしていたスイカ3個のうち2個もカラスにやられてしまいました。カラスは、草取りをしてスイカが目立った途端に狙いに来ました。よく知っていますよね。網をかけてカラス対策をしなかったことが悔やまれます。とても楽しみにしていたのでショックでした。



※普通ごみの収集コンテナを地域で設置したら、カラスが激減しました。一方、中心市街地で今また数が増えているとか。昨年11月の調査では、4,000羽以上がいると言います。

岩野田北小 文科省表彰

読書活動優秀実践校



水川和彦教育長(右)に図書館教育の取り組みを説明した鬼頭利成校長(左)と増谷幸子教諭(中央)＝岐阜市役所

地域住民が読み聞かせ

子どもたちの読書活動を促し、特色ある取り組みをたたえる文部科学省の本年度「子供の読書活動優秀実践校」に岩野田北小学校(岐阜市粟野東)が選ばれた。地域の人たちが教職員と協力して、児童が読書に親しんだり、学習に活用したりできるように取り組んでいることが評価された。(松浦健司)

同校は「出会い」と「情報共有」をテーマに図書館教育を進めている。地域の人は、一日の準備で忙しい教職員に代わって、毎朝交代で図書室を15分間ほど開けて運営し、児童の図書室利用を促進。それに加えて児童に対し、朝の活動で読み聞かせも行っている。PTAと教職員で書庫を改造して、低学年用の第2図書室を整備したほか、児童会図書委員による、児童へのお薦め本の紹介も実施している。同校の蔵書数は1407冊。

岩野田北小学校が、読書活動優秀実践校に選定されたとの記事が、今朝の岐阜新聞に掲載されていました。PTAと一緒に書庫を改造し、低学年向けの図書室を整備したり、地域の皆さんが図書室で読み聞かせ活動を行っていることなども評価されたようです。

さかのぼること、明治の学生発布の頃。当時から、地域と学校は深い関係を築いてきました。学校建設時には、木材や労務提供をおこなったり、寄付金を募ったり。一方、地域のかかわり方は学校の環境整備が中心で、教育そのものは、学校にお任せ。これが、戦後、変化の兆しが訪れました。「教育自体が学校だけではなく、家庭や地域の協力によって行われるべき」との理念のもとに、昭和22年に各校区にPTAが発足します。以来80余年(特に平成に入って、コミュニティスクールなどの制度的な整備がなされてからだと思うのですが)、広く地域や学校に共有され、実践されるに至っています。

また、地域で子どもたちを見守る活動、例えば登下校時の見守り活動、コロナ禍での消毒作業などなど。雨の日も雪の日も、本当にありがとうございます。

「私も参加したいけれど、何ができるのかしら」…まずは子どもたちに声掛けをしてみませんか。まちづくり協議会では、学校とも連携しながら、地域ぐるみで「あいさつ運動」を進めていくこととしました。「オハヨー」、「行ってらっしゃい」、「おかえり」、「気を付けてね」…。「やっとかめやね」、「まめかな」…。子どもの見守り、地域交流、防犯、災害時への備えなど、まちづくりの基本であり、そのスタートとも言える「あいさつ」の輪を地域に広めていきましょう。ポスター、シンボルマークの募集も計画しています。詳細は、ホームページに後日アップします。ふるってご参加ください。※その後、優秀作品が決定し、チラシなどに使用させていただきます。多くの作品をお寄せいただきありがとうございました。

2021.7.13 夏の七草



▲庭植の山百合

七草と言えば、奈良時代に山上憶良が詠んだ秋の七草が始まりとか。春の七草は、七草を食べる習慣や若菜摘みの習慣を背景に、室町時代の文書に登場し今日に至ります。水田付近に見られる七草にも、米文化が偲ばれます。今も七草粥の風習が継承されているのは感慨深いですね。

さて、冬の七草はさておき、夏の七草はあるのでしょうか？調べてみました。秋や春の七草と比べると新しく、明治以降に選定され、しかも何通りもありました。サギソウやハスなど水辺の涼を呼ぶものを集めたもの、アカザやイノコズチ、スベリヒユなど国が戦時中に代用食糧を集めたものなどもあります。

「夏の七草考」(明治37年)には、ナデシコ(秋の七草になります)、ヒルガオ、ハス、ユリ、アザミなど、「懸葵かけあおい 8巻6号」(明治44年)には、スイレンのほか、タヌキモなんてマニアックな食虫植物が選ばれています。『植物図絵』(昭和23年)には、ツユクサが入りました。「私の植物散歩」(昭和62年)では、ヤマユリ(写真)、ツユクサ、オオマツヨイグサが、「雑草の呼び名事典」(平成24年)では、チガヤ、ヒルガオ、ヤブカンゾウ、ツユクサ、ドクダミ、ノアザミなどが、挙がっています。比較的新しく選定されたものだけに共感できる気がします。

それでは、独断で、夏の七草を選んでみたいと思います。【続く】

2021.7.14 新・夏の七草～栗野バージョン～



▲ヤブカンゾウ



▲ノブドウ

夏の七草を、野草で見られるものを中心に独断で、選んでみました。半夏生や水辺の植物も入れたいのですが、栗野には自生していません。そこで、岐阜薬科大学と同薬草園が近くにあることにちなみ、薬草で栗野にも自生し、比較的好く見られる植物を選んだのが、次の栗野バージョン・夏の七草。

「ツユクサ」、「ユリ」、「ヤブカンゾウ」(写真)、「ドクダミ」に加え、「カラスビシャク」、「ノブドウ」(写真)、「ノアザミ」としました。七草は、野草を選定することとしているため、ヒマワリや朝顔などは、対象にしていません。

ちなみに岐阜市バージョンも選んでみました。カラスビシャクとノブドウに代えて、「コウホネ」(日野地区達目洞などに自生)、ヒトツバ(芭蕉が金華山の山肌に生えるのを見て詠んだ「夏来てもただヒトツバの一葉かな」にちなむ)を選定しました。

あなたなら何を選ばれるでしょうか？

2021.7.15 市役所新庁舎



今年5月6日にオープンした[市役所新庁舎](#)を、遅ればせながら見学しに行きました。低層部に、総合窓口が開設され、利便性が向上するとともに、オープンな印象を受けました。上層階の事務所スペースには、市民が訪れることはあまりないかもしれませんが、市内の北方面を望む展望スペースでは、金華山のすそ野を流れる長良川の流れを楽しみながら、くつろぐことができます。

2階には、その名も「[市役所大食堂](#)」が営業。午前11時ちょっと過ぎにはまだ、行列はできていませんでした。メニューも豊富です。17階の展望スペースとともに土日・祝日も営業しています。

ちなみに、メディアコスモスとの間の広場にも、昼食時には何台ものキッチンカーが店を出しています。1ポンドステーキやソースかつ丼の店などが並び(写真の左下にも2台写っています)、行列ができる人気店もあります。こちらも捨てがたいですね。

オープン当時、東京でも脚光を浴びたメディアコスモスの図書館を楽しんだり、グルメを満喫したり、市内を展望したり…新しい観光スポットになることを期待。ちなみに、地域のまちづくりや市民活動を支援する[市民活動交流センター](#)は、メディアコスモス1階にありますよ。

◀17階の展望スペースから、金華山と長良川を望む。

◀市役所大食堂でスパイシーカレー3種盛りを実食。機会があれば次回は欧風カレーを頼みます。

2021.7.20 蛙の記憶



▼県の重要文化財に指定されている栗野西の済法寺所蔵の木造十一面観音立像も、蓮華台の上にお立ちです。(出典:岐阜県 HP)



以前、日記にも書きましたが、我が家の庭には水やりする以外は水気はないと思うのですが、アマガエルやらオハグロトンボやら、大挙して姿を見せます(なぜ? 近くに田んぼはあるけれど、わざわざ訪問してきたのかな?)。突如足元から飛び出したのが、写真のちょっと大きめのカエル。2匹ほど数年前から庭に住み着いているらしい。やはりトノサマガエルらしいけれど、子どもの頃、普通に慣れ親しんできたトノサマガエルより、気のせいかもしれませんが茶色っぽい気がします。インターネットで調べてみましたが、やはりトノサマガエルらしい。ただ、いろいろな[交雑種](#)もあるらしい。

子どもの頃、小さな庭に小さな池を、父にこさえてもらいました。長良川の大水が引いた後にできる水たまりで採ってきたオタマジャクシを泳がせ、当然ですが、やがてカエルに育ちました。その中に一匹のトノサマガエルがいました。夏の暑い盛り、小さな池の傍らに陣取っていました。蠅を捕まえて、小枝の先端に付けて、口元に差し出してやると、ペロリと平らげます。何匹も何匹も。ある日、大きなトンボが、池の上に飛んできました。と、その瞬間、カエルは飛び跳ねて、トンボの上ののしかかろうとしたのです。一瞬上に乗ったようでしたが、トンボはすり抜け逃げ去りました。その食欲さに少しひいてしまいました。

ところで、カエルの解剖を中学時代だったか、授業で行ったことがあります。各自、採集した個体を持ち込むのですが、私が採集したのはとりわけ大きな個体でした。実際に行っている時はそうでもなかったのですが、やがて命を奪ったことの罪悪感がひしひしと押し寄せてきました。解剖の前後に、命の大切さを合わせて子どもたちに強く教えてほしかったと、そんな気がします。ふと思い出し、心が痛みます。今も、中学校のカリキュラムにあるのでしょうか。全国的には、廃止した学校もあれば、ウシガエルを使って実習している学校もあるようです。命の大切さを学ぶ一方、動物実験のおかげで、医学の進歩があることも忘れてはいけませんね。

2021.7.27 花ごよみ・レンゲショウマ

レンゲショウマは、深山に咲く花ですが、いつの頃からか狭い庭で、毎年花を開いてくれます。名前の由来は、写真のとおり蓮華(レンゲ)に似ているからとか。レンゲは、蓮(ハス)を指します。汚い泥に染まらず清らかで美しい蓮の花は、仏教の教えに通じるものがあると言います。「南無妙法『蓮華』経」? 仏・菩薩(ぼさつ)様の足元には蓮の花があしらわれ、蓮の花の上に鎮座されています。レンゲショウマは、わが国固有の植物で、1属1種。小さい地味な花ですが、白にうっすらと紫色が射す様子は、気品が感じられ、茶花としてもってこい。海外でもそのたたずまいは人気があるようです。花言葉の「伝統美」とは、言い得て妙です。

ところで、コロナ禍で開催された東京五輪。新種目でも10代の選手のメダルラッシュが見られます。新たな挑戦が、我が国にエネルギーを与えてくれます。

2021.7.28 土用干し

今年も梅干しが干しあがりしました。今年は例年より梅が早く出回ったのと、梅雨が長かったので、6月6日に塩漬けしてから、干すまで時間がかかりました。以前は、3日かけてカリカリになるまで干していたのですが、少し柔らかめの方が旨いと分かってからは、お天道様のご機嫌を伺いながら、せいぜい1日半で取り込んでいます。今年も柔らかめで、まずまずの出来具合。ただ、一度干した後も色づきが悪かったので、二度漬けしてから再度干しました。いつもの手で、同じように干したのですが、なぜなのでしょうね。そう言えば、母も祖母も、大祖母も、今年は良いふうにできたわ、と安堵していたのを思い出します。

今日は、「土用の丑の日」。暦の上では夏場は立秋前の約18日間が土用。更に順に数えて十二支の丑に当たる日が土用の丑の日。なので、二度、丑の日が巡ってくる年があります。

鰻と梅干を一緒に食すと良くないという「食べ合わせ(食い合わせ)」説が根強くあったのですが、最近では、土用には「う」の付くもの(うどんもそうですね)が良いとする説も出回っています。さらに、鰻と梅干は最強のコンビだとか。なぜ食べ合わせが言われるようになったのでしょうか。「梅干しで鰻を食べ過ぎてしまうから」という説がありますが、私は「普段梅干ししか食べていないのに、ある日突然、鰻を食べお腹を壊したから」ではないかと推測。近年、ますます高根の花になってしまった鰻。

土用の丑に、鰻を食す習慣は、とっくに我が家では消え失せてしまいました。まして、年に二度も土用の丑がある年なんて(どうやら来年は二度あるらしい)。

▶今年はいつよりも早く、6月6日に塩漬けしました。



◀ふっくらと干しあがりました。

2021.7.29 土用の風習

暑い時期、「う」のつく食べ物が良いと言いますね。「鰻」(滋養強壯)、「梅干し」(食欲増進)のほか、「牛」(滋養強壯)、「瓜」(体内の余分な熱や水分を出す)、「うどん」(消化促進)など。古くからの土用の風習もいくつかあり、食でも土用シジミや土用餅が一般的ですね。

ところで、岐阜市は、[全国2位の和菓子の消費量](#)を誇っていることをご存知ですか? なぜ? その背景は、もう少し調べてみないと…。であれば、和菓子屋さんなら、昔からの風習が伝わっているはず、と、毎度おなじみ、栗野東のN堂さんを覗いてみると、ありました。「あんころ餅」の貼り紙。江戸時代に普及したと言われます。厄除けとされた小豆とともに、峠に差し掛かった茶店では力餅が売られていたとも聞いたこともあります。餅は力がつくのでしょうか。また、お隣の羽島市の[みそぎ団子](#)も有名です。

風習と言えば、夏越の神事が市内でも何カ所かで見受けられます。例えば、弘法大師が伝えたという胡瓜封じは、伊奈波神社近くの善光寺で7月に行われています。[茅の輪くぐり](#)が見られる神社もあります。岐阜護国神社、加納天満宮([HP](#)には、茅の輪の制作風景がアップされています)、最近では金神社でも行われています。この近くでは、長良天神神社で8月6日のみそぎ祭で見られます。ここの茅の輪はアーチ形をしています。

今年中止になりましたが、例年小学校を会場に開催している夏まつりで、茅の輪を模した小さな輪をこさえ、子どもたちにくぐり抜けてもらおうと、風習を学びながら楽しんでもらえるかも知れませんね。

2021.7.31 長良川



▲2004年に初版発行の小説「長良川」。主人公の子どもたちが、岐阜弁で登場。



▲2008年に小説「長良川」映画化を進める会が発足し、会報の発刊やトークショーなどが行われました。残念ながら実現しませんでした。

小学校にプールができるまで、長良川にはあちらこちらに水浴場が設けられました。天気や出水状況によって、泳いで良い時には白旗、禁止の時は赤旗が、河原に降りる階段付近に掲揚されました。当時の川の水はすこぶる冷たく、5分も浸かっていると唇は紫色に変色しました。潜って川下の方を見ると、多くの魚が顔面に向かって来ました。シラハエの小魚を群れごとすくい、家に持ち帰り、金魚鉢に泳がしておくと、1時間ほどで死んでしまいます。水温でしょうか。今は多分、そんなことはないでしょう。

東京生まれの父は、口癖のように長良川は岐阜の宝だと申しておりました(当時、誰もそんな認識はなかったと思います)。昭和30年代末、小学校にプールができ、前畑さんが初泳ぎした時分にも、「川の方がよほどきれいだ」と言っていました。確かに、ある鶴匠さんは、漁に出る前に水を手のひらで汲んで、口にしていました。そんな長良川も一時は、泡が浮いて、悪臭が漂う時期がありました。今では改善されましたが、水温や透明度、魚の数は、当時とは比較にならないでしょう。そんな長良川での水難事故が全国でワースト2との記事が、岐阜新聞(7月28日付け)に掲載されました。岐阜の宝であるとともに、危険が潜んでいることを忘れてはなりません。穏やかな水面も、水中では「左巻き」などと言われるように、引き込まれたら浮かび上がってこない場所もあります。

岐阜で育った松田悠八氏の小説「長良川」にも、そんな思い出が綴られています(一時、地元では映画化の動きもありましたね)。2008年には、小説の映画化を進める会が発足したこともありました。

栗野の自然を代表する鳥羽川も、残念ながら親水空間は皆無と言えます。公園が少なく、通過交通の多い地域にとっては貴重な空間です。都市居住の魅力を高め、子どもたちの遊び場と環境学習の場となるよう、[親水空間の整備](#)(まちづくりの芽 P26 参照)は、地域と行政の共有すべき、まちづくりの大きなテーマと言えます。



2021.7.31 ホームページ

Yさんの投稿

今年度から、自治会役員になりました。まだまだ分からないことばかりですが、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思います。今日はホームページ制作をしました。初めての投稿記事の制作は難しかったのですが、なんとか投稿できてほっとしています。

2021.8.2 高麗きびとつきあげ

子どもの時分、トウモロコシつまりコーンを指して、高麗きび、南蛮きび、唐きびなどと言いました。祖母は、「高麗きび」派でした。コーンの原産地は、中南米とする説が有力で、コロンブスがスペインに持ち帰って欧米にも広がり、日本へは16世紀にポルトガルから伝えられたと言います。だとすると、「南蛮きび」が正解？しかし、現在の唐モロコシ(玉蜀黍=玉のような中国のきび)という名からも、アメリカから新品種が輸入栽培される以前は、中国や朝鮮半島を経由し、もたらされた品種があったのかもしれない。一度だけ、自宅で栽培、収穫したことがあります。即、茹であげた味は格別でした。いかに流通技術が飛躍的に向上したとは言え、地産地消は、省エネの面だけではなく、特に野菜にとっては味がまるっきり別物だけに今一度、その意義を見直したいところです。

ところで、さつまいもなど主に野菜の天ぷら(これも語源はポルトガル語)を、この地方では「つきあげ」と呼んでいました。鹿児島では、潰したジャガイモを、揚げたものをつきあげと言うそうです。一方、つけあげは、揚げた蒲鉾(さつま揚げのこと。この地方でははんぺんとも)。それとは全く別物ですが、小麦粉などをつけてあげる意味の「つけあげ」が、なまって「つきあげ」になったのでしょうか。ご存知でしたら教えてください。



◀どちらも懐かしさ漂う夏の味覚です。

2021.8.4 金瓜

真桑瓜(黄金まくわ)を、子どもの頃から金瓜又は黄石(こうせき)瓜と呼んでいました。先日、農協の店頭には、「甘瓜(黄石うり)」のラベルが貼られていました。その昔、新盆の仏壇にお供えされていた金瓜は神々しく輝いて見えました。初めて祖母に食べさせてもらい、その甘さに驚いた時のことを今でも鮮明に覚えています。その後、この瓜を長い間見かけませんでした。縄文時代から食べられてきた由緒ある食材も、より糖度の高い食べ物にその座を奪われたのでしょうか。絶えてしまったかと思った時分、お伽噺のような出来事が起きたらしい？真偽のほどは定かではありませんが、名前の由来でもあるお隣の本巢市の真桑地域に、川上から瓜が流れてきたそう。その種子から栽培が再び始まったとか。昭和の終わり頃に聞いた気がします。これは事実でしょうか、ご存知の方ありませんか？

記憶に残るあの甘さとともに、さっぱりした味わいは、郷愁を誘います。ただ、種子はもう少し大きめで、柔らかかったような気がします。ぬるっと繋がった食感が好みでしたが、今日の種は、固くて食べられません。品種が変わったのでしょうか？

ちなみに、近隣にはいくつか伝統野菜が見られます。お隣の山県市の美山地域で栽培されている桑の木豆も有名ですね。

2021.8.5 大雨時行(たいうときどきふる)の候



久しぶりに眉山に夏雲が沸いた8月2日、72候(しちじゅうにこう)の「大雨時行」を迎えました。72候は、立春や夏至などの24節気をさらに約5日ほど3つに分けて、動植物の変化などできめ細やかに季節を表したものです。実際の季節の訪れとズレを感じることもありますが、「大雨時行」の暦のとおり、これを境に大気が不安定になっています。加えて台風上陸の恐れありの予報も発せられています。一方、暦(24節気)の上では、「大暑」。今日は、37度越えが予想されています。

東京オリンピックの熱気も最高潮。スケートボード金メダル候補の長森南中の岡本碧優選手は、4位となりましたが、重圧のかかる中、難易度の高い技に挑戦する姿に心打たれました。彼女の競技直後に各国の選手が駆け寄り、担ぎ上げられたシーンは、他の競技ではお目にかかれませんが、それは、世界ランキング1位の岡本選手の果敢なパイオニア精神への高い評価であるとともに、新競技に込められた、そして10代の選手たちの世界に向かったメッセージでした。

朝から厳しい暑さ。コロナ禍でのマスクもさることながら、意外にも[熱中症は住居の中で起きる割合がダントツ](#)とか。テレビ観戦の際も、くれぐれもご用心。

2021.8.7 日照りの朝曇り



小学生の頃、地域に伝わることわざを調べる宿題が出ました。地域に伝わるというのがミソです。近辺には全くそれらしきものはなく、私はできませんでした。地域の風土に即した暮らし、特に農作業に役立つことわざは多いのではないかと思います。栗野に伝わることわざ、何かありませんか。

「日照りの朝曇り」は、この地域だけのことわざではありませんが、このところ、なるほど、と実感する日が続きますね。

昨年に引き続き、今日の長良川の花火大会は中止に。主催者の新聞社の今朝の紙面から動画配信が企画されています(写真右)。来年は、実際の音だけでも聞いてみたい。

不要不急の外出を控えつつ、夏の風情はホームステイで味わい、暑さを乗り切りましょう。暦の上では、今日は立秋。

2021.8.8 続・ツマグロヒョウモン



多治見市が全国で今年初の 40 度越え、岐阜市も 39 度を超えました。焼けつくような暑さの中、モンシロチョウもモンキチョウも、この時期には姿を見せません。が、6 月 30 日の日記で紹介したツマグロヒョウモンだけは庭を飛び回っています。飛び始めた頃は、メスばかりだった気がしますが、今の時期は、オスの姿(名の由来の翅の端に黒い模様がない)がやけに目立ちます。つがいであったり、3 匹が相方を奪い合うように舞っています。

蝶の採集に熱意を込める人は少なくありません。それも並々ならぬ熱意です。いつの間にか連れ合いまで巻き込んで、夫婦で採集旅行に行く方があります。採集するときは、事前に地元の人にあいさつに伺い、了解をとられます。クマなどの情報も親切に教えていただけるとか。何事もマナーは大切です。近年、温暖化のせい、**「蝶の発生時期が無茶苦茶」**だそうです。確かに、今年は、桜にしてもバラにしても、随分開花が早かったですね。

もはや、ささいな変化にとどまらなくなってきた自然界の変化に、注視!

2021.8.10 続・続・ツマグロヒョウモン

ツマグロヒョウモンの幼虫を発見。庭をもぞもぞ這っていました。食草のスミレに移してあげました。春先はパンジーが丸裸にされるくらい繁殖しますが、暑い時期にもいるんだあ。東海地方で姿が見られるようになったのは、1990 年代以降とか。温暖化でどんどん生息域が北上しているようです。

2040 年までに気温は 1.5 度上昇するとの記事が朝刊に載っています。子供の頃は夏休みでもせいぜい 32 度、高くても 36 度までだったと思うけれど。と言うことは、最高気温だけで言えば、半世紀で 3 度も上昇?! (もっとも、そこまで上昇したという**データ**はないようです)。二酸化炭素の排出量削減への挑戦と実現が、私たちに新たな道を切り拓くとともに、さまざまな成果をもたらしてくれるはず。危機感を、希望に代えたいものです。

2021.3.8.12 花ごよみ・盆のユリ

旧盆が近づく頃、粟野台団地周辺に毎年咲き誇るユリ。花の背に紫っぽい筋の入ったのが、タカサゴユリ。これに混じって真っ白なシンテッポウユリも咲いています。どちらも種子でも増えるため、植えた記憶もないのに、いつの間にか近隣の住宅の庭にも咲いています。タカサゴユリは、台湾原産で観賞用だったのが、野生化。一方、シンテッポウユリは、タカサゴユリと日本原産のテッポウユリとの交配種。1年で開花するため、お盆向けの切り花として生産もされています。今、産地では、出荷がピークを迎えているのでしょうか。

コロナ禍で、里帰りの自粛が叫ばれています。何より、危機感を共有することが欠かせません。



▲タカサゴユリは花卉に薄紫の筋が見られ、茎に細い葉が密に生えています。

2021.8.14 大雨…災害情報に注意

[土砂災害警戒](#)のため、岩野田北地域の危険な場所からの「[警戒レベル3](#)」[高齢者等避難](#)が、13日17時に[発令\(防災行政無線でも周知\)](#)されました。くれぐれもテレビや市のホームページなどの関連情報にご注意を。災害が生じないことを願うばかりです。避難時の安全確保、食料等の持参など、日頃からいざというときの注意事項を確認しておくことが大切です。最初に開設される避難場所は、岩野田北公民館。大規模災害時には、小学校の体育館も予定されています。現在、[体育館へのエアコン設置](#)が進められているのは、地域にとっても有難いですね。

2021.8.18 心太(トコロテン)



▲箸は1本で食べるのがミソ。痛んでいると切れやすいため、腐っていないか確認するための美濃地方の風習らしい。

その昔、駄菓子屋でも売られていたトコロテン。木製の道具から突き出される透き通った非日常の食べ物に、子ども心をくすぐられた経験のある方も多いのでは。なのに、祖母からは、「食べてはいけない」とキツく止められていました。多分、道具の手入れや生水など、衛生面からでしょう。感染症と関係する経験もあったのかも知れません。蠅が大挙して飛び回っていた時代です。八百屋のケースに並べられていた和菓子の表面を、白いカビが覆っていたことも日常茶飯事。こんなこともありました。お祭りの日に屋台で串カツを1本買った時のこと。

「何の肉か分かったものではないから2度と買ってはいけない」と諭されました。今、トコロテンや屋台の串カツに思い入れが深いのは、子どもの頃に禁断の食べ物だったからかも知れません。県内のコロナ感染者は、爆発的に増加し、昨日は、過去最多であった155人の倍以上の324人を数え、社会は危機的状況に直面しています。30代以下が感染者の67%を占めていると言います。戦前、乳幼児の10人に3人が15歳まで生き延びることのできない時代がありました([人口問題研究所](#))。保健衛生も医療環境にも恵まれた今の若者に、感染症への恐怖や危機感が共有されないのも無理もないことかも知れません。

自粛疲れという言葉がニュースで流れています。とんでもない、これは、災害なのです。有事であることを理解し、みんなで乗り切らなくてはならないのです。

2021.8.19 蒙霧升降（ふかききりまとう）の候



立秋も蒙霧升降（ふかききりまとう）候へ。長雨で全国各地に被害が発生しています。洗濯物が乾かないという不満は、井上陽水の名曲「傘がない」に通じるものがあります。しかし、長雨と言え、昭和51年9月の大水害の記憶が私たちによみがえります。復興には多大なエネルギーが費やされました。旧盆にこれだけの雨が降り続いた記憶はかつてありません。五輪の閉会式を終えてからというのは、偶然でしょうが、何より、被害に遭われた地域の、いち早い復興を願わずにはられません。

災害に対しては、私たちの備えと努力が欠かせませんが、現下のコロナ禍という深い霧を、人類の英知を集結して一刻も早く吹き払ってほしいと願わずにはられません。

◀早朝、いったん雨が上がり、虫の初鳴きが聞こえてきました。

2021.8.27 早朝の5分間



▲頭上に名残の月
(5:48)



▲飛行機雲が伸びる
(5:53)



▲朝露が結ぶ(5:50)



▲清々しいツククサの花(5:50)

梅雨のように降り続いた長雨も昨日ようやく上がり、再び暑さが戻ってきました。夏休み前に刈られた草がもう伸び、葉に結んだ露が朝日に輝いています(5:50am)。気付かずにサンダル履きの素足で踏み分けると、その冷たさに驚くと同時に、秋近しを感じますよね。

空には名残の月(5:48am)、陽が昇ったばかりの東の空に目をやると、飛行機雲が西へと伸びていきます(5:53am)。公園の脇には露をまとったツククサの花(5:50am)。万葉集に詠まれている別名は「月草」。空の月、足元の露、早朝の風景が「着き草」(染料に使われたことによる別名で月草の由来とも言われます)の鮮やかな青色に映し出されています。

朝一番のニュースは、今日もパラリンピック一色。心揺り動かされる一日の始まりです。

2021.8.28 真夏の7日間?

今年は長雨だったせいもあるのか、蟬の声が少なかった気がします。それに、ツクツクボウシの鳴く頃なのに、まだアブラゼミと一緒に鳴いています(Ziriziri~)。蟬の翅は通常透明だそうで、油を塗ったような褐色のアブラゼミは異例とか。ところでここ数年、ミンミンゼミの声を聴く機会が少なくなったと思いませんか。今年初めて、栗野台でミンミンゼミの鳴き声。かなり昔、市内でクマゼミ(Syasyasya~)が激減した原因は、土地開発のせいだという説がありました。今は普通に鳴いてますよ。私が大好きなヒグラシは、残念ながら、栗野では聴けません。蟬と言えば、羽化して1週間の命と思い込んでいたら、アブラゼミは1カ月程度生きるというデータもあるとか。ツクツクボウシと一緒に鳴いても不思議ではないわけですね。ちなみにカゲロウの成虫は数時間から1日ほどの命とか。一生は「陽炎」のごとく…?!

2021.8.29 花ごよみ・クサギ



▲花が終わった後、赤いがくが青い実を包みます。

残暑厳しい中、クサギの花が暑さに負けず咲き誇っています。葉に少し癖のある匂いがあるのが名前の由来。ごく普通に見ることができる木ですが、若葉を山菜として利用できるとか。あの匂いからすると少し敬遠してしまうのですが、収穫した後は匂いが消えてしまうのだそうです。また、果実は草木染に使われたり、外国では街路樹として植栽されている例もあるとか。この木をもう一度見直してあげたい。植物をはじめ自然界と人間の関りは、奥が深いことを改めて認識させられました。子どもたちにもフィールドで教えてあげたい植物です。

2021.8.31 ロバのパン屋さん



久しぶりに「ロバのパン屋」の車が、例の音楽を鳴らしながら回って来ました。子どもの頃は、ロバではありませんが、馬(木曾馬?)が引いていました。ピーク時の1960年頃(第1回東京オリンピックの少し前の頃ですね)には、西日本を中心に約70代の馬車が巡回していたそうです。創業者は、明治24年生まれ、なんと谷汲村の出身だそうです。饅頭屋で丁稚奉公をし、パン作りを習得したそうです。なので、ふかしパンなのですね。全国を歩いて、今で言うフランチャイズ店を募ったそうです。戦後、いったん廃業したパン屋を開業し、昭和28年頃には代理店も増え、「ロバのパン屋」が誕生したとのこと。初めて食べたときには、普通のパンとは異なる食感でしたから戸惑った記憶がありますが、馬車が回ってきたときの場面と音楽は鮮明に記憶に残っています。さきほど窓の外から流れてきた音楽を聴いて、つい追いかけて、クリームパンとクルミパンを手にしていました。今では、岐阜市などに4店と京都の本部のみとか。ちなみに日本昭和村でも販売しているそうです。